

Title	<第1編 タイ国>【事例3】Cooper / 北タイ / Hmong 族
Author(s)	福井, 捷朗
Citation	重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ：総合的地域研究の手法確立：世界と地域の共存のパラダイムを求めて (1994), 5: 10-14
Issue Date	1994-09-30
URL	http://hdl.handle.net/2433/187463
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

【事例3】 Cooper／北タイ／Hmong 族

1. 調査

対象

北タイ、山岳地帯の焼畑耕作民 Hmong 族(Miao または Meo ともいわれる)の村、4ヶ村。集落当り20-31世帯。チェンマイの南西から北西にあり、Hmong 族の村という以外には、相互に関連はない。

調査者

Robert Cooper

調査期間

1973年7月－1975年3月

報告

Robert Cooper. 1984. *Resource Scarcity and the Hmong Response: Patterns of Settlement and Economy in Transition*. Singapore: Singapore University Press. 314 pages.

2. 対象の概要

地域の概況

北タイには、およそ20万人の山地少数民族が住むといわれるが、その中で Hmong 族はカレン族に次いで多く、約5万人といわれる。かれらは陸稲、トウモロコシなどの焼畑耕作をし、また、一部はケシを栽培することで知られる。かれらの多くは、土地資源の枯渇により焼畑休閑期間の短縮、耕作年数の増加を余儀なくされており、土地の不可逆的劣化の危機に直面している。しかし、資源不足がこれら山地民の人口増加によるものであるとの事実は、確認できない。むしろ、資源枯渇は、(1)平地タイ人の山地への進出、(2)林業との競合のよっている。

対象集団の概要

Hmong 族人口は、中国に2,680,000人、ヴェトナムに233,000人、ラオスに100,000-150,000人、北タイに50,000人と言われる。北タイでは標高1,000m

以上に住み White Hmong, Green Hmong の2つあるが、いずれも外婚父系氏族からなり、調査4ヶ村で7つを数える。

4ヶ村の概要は以下の通り。

- (a) Huai Menao; Hmong 27世帯、北タイ人4世帯。チェンマイ南50°_北 の Chom Thong から登り7時間。ケシ栽培と焼畑陸稲。
- (b) Pha Nok Kok; Hmong 19世帯、北タイ人1世帯。チェンマイ北西45°_北。生業は2極分解中；ケシ・陸稲に対して水田・ケシ代替換金作物。
- (c) Khun Sa; Hmong 21世帯。Chiang Dao - Mae Hong Son 間の Pa Pai から3-4時間の登り。水田・ケシ代替換金作物。
- (d) Pha Pu Chom; 21世帯。とくに貧困。水田耕作への転換の試みの失敗例。かつて Van Roy が調査。

Van Roy, E. 1971. *Economic Systems of Northern Thailand: Structure and Change*. Ithaca: Cornell University Press.

その社会構造の概要は以下の通り。

Division; White と Green Hmong。文化的区別のみ。普通は1ヶ村に同居しないが Pha Nok Kok では同居。

Clans; "se'" (中国語)。4ヶ村では2-7氏族／村。他村への移住には clan 関係 (*kua ti*) が重要。

血統 (*ii jua kua ti*)；4代以上は遡らない。共通の祖先とされる人物は多く実在の人物。"tu hao zo" (文字通りには村長の意) と呼ばれる。1ヶ村が同一血統のみからなるのが理想とされる。現実には村は複数血統からなり同一血統構成員は多数村に散在しその長が明確でないこともある。

世帯 (*jay*)；もともと基本的ユニット。移住の決定は世帯レベルでなされる。

婚戚；"neng ja" = 妻方。"yao jua" = 妻の父親

3. 調査項目と方法

在村人口

各村の年齢構成。Pha Pu Chom については5年間の変化。

移住

現住村での世帯別在村年数、現住村移住以前の村での在村年数、結婚相手の出身地現住村への移住の経過。

社会構造

氏族、所属氏族、親族呼称、家屋配置、リーダーシップ。

生産、経済

雇用労働、男女間労働配分、ケシ収量、陸稲焼畑／灌漑水田／ケシの生産性比較、牛／馬／水牛数、世帯別所得(全世帯、米収支を含む)、性年令別アヘン常用者数。

4. 主たる結論

ケーススタディーとして

北タイにおける資源枯渇の原因は、林業、低地タイ農民の山地への進出、ケシ栽培山地民の農法(連作後の放棄)、それに山地民の人口増加である。ただし、山地民の人口増加は確認できないし、あっても資源枯渇原因としては重要ではない。

資源枯渇 → 休閑期間の短縮 → 生産性の低下 → 貧困化は、すべての Hmong 人村でみられるが、その程度は異なり、したがって、社会組織に対する資源枯渇の影響も異なる。

理想とされるのは、血縁、姻戚関係で結ばれた世帯群(*jay*)が、居住、経済、政治単位としての *zo* (血縁と村を同時に意味する語)を形成し、それが短距離、規則的な移動を行なうこととされ、第2次大戦前の北タイでは、実存していたと思われる。

資源枯渇によって陸稲休閑は、理想とされる15-20年から最低3年にまで短縮され、それはケシ栽培によって補償されている。すなわち、ケシによってより長期の土地利用、居住と、より高い人口密度が可能となっている。この状況下では、*zo* は血族集団ではなくなり、複数血族、複数氏族、複数 *division*

から構成されるようになり、また、氏族、姻戚関係を頼った移住が盛んとなった。

ケシ栽培以前には、近親間の相互扶助、間接的互酬、再分配によって社会構造が保持され、かつ余剰を生じる余地が少なかった。換金作物によって余剰生産が可能となり、その再分配は夫／父親の手中にある。その一部は、雇用労働（カレン族、北タイ人）に再投資され、貧富の差を顕著なものとしている。また家族労働力の労働強化（妻など）をも結果した。雇用労働と家族労働（間接的雇用労働）の二通りの労働力は、水田耕作と換金樹木作物による定着化を促進している。

自給的焼畑、ケシ栽培、水田耕作、永年性換金作物栽培は、排他的ではなく、種々の程度に混在している。これらの移行を律する重要因子は、資本である。生業形態の変化による貧富の差が顕在化しつつあるが、いまだ社会階層化には至っていない。しかし、貧富の差はやがて階層分解を結果するであろう。

Hmong 族民族誌として

Geddes の結論：

Geddes, W. R. 1976. *Migrants of the Mountains: The Cultural Ecology of the Blue Miao (Hmong Njua) of Thailand*. Oxford: Oxford University Press.

すなわち、「ケシ導入がより不安定な居住を結果している」は、事実と反するとする。

また、Van Roy(前出)が主張した生産、再配分における村レベルでの協力、移住に際しての“village consensus”も認められず、世帯が実際上の経済的、政治的主体であるとする。

社会変化理論として

データは、基本的には Boserup を支持するが、いくつかの訂正を要するとする。たとえば、陸稲栽培の休閑期間は、3年以下になることはなかった。bush fallow → 草地 → 牧畜の変化はなかった。無休閑農耕への移行(ここでは水田耕作)は棚田灌漑を必要とするため、多大な困難を伴う、など。灌漑水田が困難なため、代ってケシが導入されたが、7-10年後には土地を放棄せざるをえ

ない。つまり、土地人口比の低下は陸稲焼畑の休閑期間を短縮したが、すべての焼畑が水田に変化することではなく、代って陸稲焼畑 → 換金作物焼畑という適応がみられた。

5. コメント

資源枯渇は必ずしも人口増加によるものではないとするが、人口の変化に関するデータは十分ではない。

資源枯渇によって焼畑休閑間が短縮され、生産力が落ちるが、それがケシ栽培によって補償されているという。現状は確かにそうなっていると思われるが、このような状態に至った理由として、休閑期間の短縮が先であったのか、ケシ栽培の導入が先であったのかは、必ずしも明らかではない。つまり、ケシという換金作物の導入によって定住が有利かつ必要となり、その結果として休閑期間の短縮を許容した、とはいえないであろうか。ちなみに、ケシ栽培には石灰質土壌、塩基性土壌など、特殊な土壌が適することが知られており、そのような土壌地帯に定住することは、ケシ栽培に有利である。一般に、換金作物導入、医療・教育の機会、治安の保証、政府の規制などが定住を促進し、その結果として、人口の局所的な集中が起こり、それが焼畑休閑期間の短縮 → 土地の非可逆的劣化をもたらすといわれている。

(福井捷朗記)